

酒をも過したるより起りし陳枯なれば幾重にも醜勘撫を願ひ奉るどれふその顔を長慈に
し何心なし諦視め給へばこゝ如何に過日、麴町にて垣間見て今も心に忘れかぬる妓娘なれ
ば大に駭き相手の老人殊に酒の上の疎相とあれり免し遣へすべし然し念の爲め宿處家名を
尋ねおくやうと言、徐に従者と思はれバ従者之心の内底の好色なる妍き娘の辨解を聽て、既
に御心の解け給ふこゝ片腹痛けれと思ひなぐらも主の言また否むべくもあらねり些少言と
和げてこのまゝ免すべし奴ならぬと殿の御慈愛厚き御意に任せて今日の客敷いたして取ら
する以後の心を用ひよ宿處の何處ぞ家名の何とか申そどんと横柄に問揚れば老人いよ
く恐入り私へ麴町三丁目に住居なす八百屋商伊勢屋善兵衛と申す者又是ある、私娘
花と申す者只今の不禮の真平御用捨と尙も大地に首を下るを長慈にしに言優しく老人此
程の事を左迄に謝るに及ばず其方に怪我が無うて何寄目出度しといひつゝ娘の顔を斜睨に
うち見やり心のこして立去けり此で長慈にしに屋敷へ歸りたまひ志ヶ彼娘の容貌の面前
に露顯て兎角に忘れがたければ其翌日近從の者と麴町なる善兵衛方に通じし娘花を妻に嫁
の屋敷と指してソ馳行きける

○ 第三回

却説岡部焼前守長慈はしに、弟美濃守殿の諱音を聞いて鞍馬に鞭と加へ急ぎ山王の宗家へ
馳附けられ泣入る奥方を説諭め家老野村多仲を始め用役の甲乙と協議を凝して、當主美濃守